

氏名(本籍)	居原田 玲香(滋賀県)
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第 60 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位論文題目	高齢者にとっての転居したことの意味 - 現象学的分析方法を用いて -

## 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	62	(ふりがな) 氏 名	い づ だ 居 原 田 い い か 玲 香
修士論文題目	高齢者にとっての転居したことの意味 —現象学的分析方法を用いて—		
<p><b>【研究目的】</b> 高齢者にとって転居したことはどのような意味があるのかを明らかにすること。</p> <p><b>【研究方法】</b> Giorgi,A.の現象学的アプローチを用いた質的帰納的研究である。</p> <p><b>【結果】</b> 半構造化面接法を行い、7名の研究参加者が語ったデータを逐語録に起こし、転居に関して意味解釈可能な575の場面が抽出された。次に、各研究参加者毎の状況的構造を明らかにし、その後、各研究参加者のテーマを統合し、高齢者の転居に関する一般的構造を明らかにした。最終的に、高齢者の転居の意味は15のテーマに分類された。更に、そのテーマを自己—他者—世界の関係性とそれを調整しようとするテーマに分類した。</p> <p><b>【考察】</b> 高齢者の転居が特に問題となるのは、今まで生きてきた場所で築いてきた家族のあり方や地域の人々とのふれあい、自分らしさをもち、存在していた場所から切り離されて、新しい場所での新しい人間関係の構築や、居場所づくりの困難さを感じるためと考えられる。しかし、転居後の高齢者は、新しい生活を始めるために、「振り返ること」によって転居前の生活と、転居後の生活を統合し、“今、自分は一体誰で、何をやる人か”ということを確認している。また、従来のある方を変更しようともしていた。先行研究においては、強制的転居は、転居後の生活にうまく適応できないとされているものが多い。しかし、本研究では、強制的転居であっても、高齢者は自分の持つ可能性や力を発揮し、誰かに頼りにされているという自信、家族や地域の人々とのつながり、新しいことへの挑戦をし、自分の居場所を確認し、転居後の土地に留まろうとしていた。つまり、転居後、新しい場に適応しようとする高齢者は模索している段階であると考えられる。</p> <p><b>【総括】</b> 高齢者は、転居によって様々な調整をしていた。家族の一員として、また、地域の一員として役割を担うことが、自分らしさを失わずに生き生きと生活できるということが明らかとなった。転居前の生活を、「振り返ること」は、決してマイナスではなく、生き生きと生活していた自分を思い出し確認することで新しい一歩を踏み出せる力に変えることが出来るということが示唆された。このことから、以下の看護への提言をする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.臨床の場で、転居する高齢者の心を深く見つめること。それは、高齢者と共に、人生を振り返りながら話し合うことで高齢者の思いを整理し、次なる力を引き出すために必要である。</li> <li>2.家族には、高齢者と思い出を共有することから、高齢者を理解することにつながることを説明する。そして、転居後の高齢者の地域への馴染みの形成には家族の支えが必要である。</li> <li>3.高齢者の持つ力に目を向ける。高齢者と家族の思いのズレを調整すると共に、看護者は、家族を含め、高齢者が出来る役割の保障をし、見守るように説明する。</li> <li>4.転居してきた高齢者を、地域社会の中に迎え入れる取り組みを、地域住民と共に行う。</li> </ol>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)  
2. ※印の欄には記入しないこと。